

HIMARI のヴァイオリン演奏を聴く

藤原 道夫

HIMARI こと吉村妃鞠は音楽家の両親の許 2011 年 6 月東京で生まれた。早くからヴァイオリンを弾く才能を発揮し、10 歳までに出場可能な国内外 40 ほどのコンクールすべてで優勝を果たす。10 歳でカーティス音楽院（フィラデルフィア）に合格し、主にアイダ・カヴァフィアンの指導を受けている。この頃から HIMARI と名乗る。13 歳でベルリン・フィルハーモニーの定期公演に招聘され、難曲とされるヴィエニャフスキのヴァイオリン協奏曲第 1 番を堂々と弾いた。評判も上々。これらのことが NHK のドキュメンタリー番組で放映された。

番組を見て他にもいくつか印象に残っている事がある。カーティス音楽院での公開レッスンの折、幼い姿の HIMARI が弾き始めると、その見事さに聴衆（生徒）のあるものはシャツを噛み、あるものは呆然としていた。アイダ先生のレッスンを受けていた時、HIMARI が言い出す「これから予定の美術館見学の授業をキャンセルしてください」。先生は答える「ぜひ出席しなさい、音楽以外の事を知るのも大事です」。先生はまた「日曜日には練習をしないように、休むのも大切ですよ」とも言う。超一流の音楽院に早くに合格し、優れた教師の薫陶を受けながら他の俊英と切磋琢磨する、この上ない環境の中で育まれている。

その HIMARI が、15 歳の誕生日少し前、N 響定期 C プロ 6 月公演に登場した。演奏したのはシベリウスのヴァイオリン協奏曲二短調作品 47、私の最も好きな曲の一つで多くの世界的名手の演奏を聴いてきた。今回聴くうえで次のポイントに注目する。一つは出だしの繊細な弱音と高音域の第一主題、続く第二主題の中音域のふくらみをどう弾くか。次に第 2 楽章の耽美的な中音域の音をどう出すか。全体的にオーケストラ（特に管）とどう戯れるのか。

素敵に演奏だったと思う。高音域は雑味なく磨き上げられていたし、中音域ではヴァイオリンが奏でる音の美しさを満喫できた。音量はやや抑制的で品位を保つ。15 歳前にこんなレベルに達しているとは！ 私はそうに感じたのだが、聴衆の中には抑制的音量の演奏を不満に感じた者もいたよう。オーケストラの方は、指揮者の尾高忠明が HIMARI の演奏に寄り添うように、控えめな音出しをした。この点でヴァイオリンと管楽器の音の戯れが物足りなさを残したかもしれない。音楽の演奏をどう受け止めるか、人それぞれの好みがある。今回の HIMARI の演奏は、私の好みに合っていて素敵だった。